

シニアライフプロジェクト

第6回

「自分らしく生きる」高齢者をご紹介！

これから年を重ねていく区民の皆さんに、高齢になったときの生活をイメージしていただき、誰もが自分らしく暮らすことができる環境づくりを目指した取り組みです。

後遺症を克服し、訪問理容のボランティア ～病は地域で治す～

「外出できなくなった妻の髪を切ってほしい」。
そんな要望に応え、ボランティア団体“男塾”では
訪問理容の依頼も受け付けている。出張するのは、
約30年の理容師経験がある川原義博さん（75）。
ガンを患いながら活動を続ける川原さんに話を聞いた。

男塾のメンバーになったのは約8年前。かなめ病院の主治医に「行ってみらんかい」と誘われたのがきっかけだった。

“病は病院だけでなく、地域で治す”。近くに知人もおらず、ギャンブル三昧。家に閉じこもり、ふさぎ込んでいた本人を心配した主治医が“男塾”を運営する松下繁行さんに相談した。川原さんは「（松下さんが）家まで勧誘に来た」と嬉しそうに当時を振り返る。



「あぁさっぱりした。
久しぶりの床屋だわ」
喜んでもらえるのが
何よりのご祝儀



ギャンブルはほどほどに。
胸ポケットから出てきた
ハズレ馬券。決めた金額
の範囲内で楽しんでいる。

約30年前まで大阪で理容店を経営していたが、立ち退きを機に、妻の実家がある愛知県知多市に引っ越した。名古屋市立大学病院近くの理容店で8年働いた後、運送会社に転職、15年前、南区に引っ越してきた。

仲間と談笑し元気そうに見えるが「病気のオンパレード」と話す。男塾のメンバーになって間もなく脳梗塞を発症。麻痺が残り、声が出なくなった。入院して2カ月間懸命にリハビリ。その間も男塾のメンバーが励ました。「入院中に病院を抜け出し、（ボランティアで）植木を切りに行ったら怒られた」ことも。

**バリカンはいや！
要望に応じて
ハサミで少しずつ整える**



**植木の剪定や家の片づけ等
にも積極的に参加**



リハビリの甲斐あって後遺症を克服。現在、月に3件ほど理容の依頼を受けている。男塾メンバーの散髪も行い、メンバーからは500円が「おたがいさまの家みなあん」の運営費として寄付される。

昨年、「寝たきりになった妻の髪を切ってほしい」という要望に応じて出張。妻はその後まもなく他界した。葬儀費用の工面に悩む夫をみかねた川原さんは「オレが出すよ。三連単（競馬）で当たったから」。確実に返ってくるか分からないお金。結局、川原さんの申し出は却下され、町内会役員や男塾のメンバー等有志が1万円ずつ出しあい、費用が半分以上になるよう交渉してまかった。その費用は後々、丁寧な手紙とともに返されたという。

「ここに（引っ越して）来てよかった。話ができる仲間がいてよかった」。白内障、心筋梗塞、前立腺ガン…。病を受け入れながら、長年培った技術を活かして地域に貢献する姿はとても清々しく、ステキな仲間にも囲まれて幸せそうだった。

**「ここに来て話をするのが楽しい」
週1回「おたがいさまの家みなあん」
に集まって、コーヒーを飲みながら
談笑したり将棋をしたりする男塾メン
バー**

.....
“男塾”はシニアライフプロジェクト第5回で詳しく紹介しています。
あわせてご覧ください。

